テトリス

サイゼリヤの店長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テトリス

【Ｎコード】
Ｎ６５２４Ｌ

【作者名】
サイゼリヤの店長

【あらすじ】
目が覚めると不思議な部屋にいた。そこには友人の理沙、裕也、篤、そして見知らぬ男女と私の六人であった。しばらくすると、その部屋の天井からテトリスのテトリミノが振ってきた。これはいったい何を意味しているのか？また、彼らはどうなってしまうのか！？

1Line

私は、河合美佐。現在は大学二年生。顔はどちらかというと、普通より上のほうに入るのではと自分で思う。目もぱっちりで、鼻筋はしっかりしていて、口は一般的な感じ。小学校から大学までずっと明るい性格をしていたと母親やお世話になった人から聞いている。自分では普通にしているだけなのだが。
そんなこんなで大学に入学して早二年。あの出来事は今でも忘れられない。思い出すだけで吐き気を催してしまう。それは去年のある夏の日のことである。

目が覚めると、見に覚えのない部屋にいた。
周りを見渡すと、何人かが倒れていた。その中には友人も何人かいた。

それにして不思議な部屋だ。横幅が１mほどの広さの部屋でとても狭いしドアもない。まるで路地のようだ。壁も床も色は黒。
天井は高く、どうやらこの部屋から出ることは至難の技のようだ。天井や壁、床を見ても電球や蛍光灯。またはそれらの役割をするものが一切ないのにも関わらず、部屋には少し光がある。ふと天井を見たが太陽の光が差し込んでいるようではない。やっぱり不思議だ。倒れている人の数を改めて数えてみると六人倒れていた。
そのうち友人は理沙、篤、裕也の三人いたが、私は真っ先に、

「ねぇ、大丈夫？」

と倒れていた理沙に私は声をかけた。
姫野理沙は大学の同級生。

高校の時に知り合って以来、一緒によく遊んだ。
理沙はとても明るく、話をしているといつも話題を作ってくれる。
高校の時もクラスのムードメーカー的存在で、皆に好かれていた。
誰にでも優しく、私の親友でもある。目はぱっちり二重で、鼻は少し高く、口はなんて表現すればいいのか分からないけど小顔でかわいい。髪は茶色でセミロングで似合っている。

「うぅ・・・。ここは？」

理沙が目を覚ましたようだ。

「うちも分からないんだよね。目覚めたらこの部屋にいて。」

そう答えると理沙が私の後ろのほうを覗いて、あっ。と言った。
何事かと思い後ろを見ると、裕也と篤の目が覚めて起き上がっていた。
立ち上がると、二人でなにやら会話をしている。きっと混乱しているのであろう。
篤と裕也も私の同級生。
話たりしているうちにすっかり意気投合して、よく一緒にいる。
私はそう思わないが、皆は彼らのことをかっこいいという。

「なんであの二人も？」

理沙は私に聞いた。

「さぁ・・・。さっきまでは倒れてたんだけど。目が覚めたらしい。」

私は答えた。

「そっか。」

理沙がそういうと、私は理沙の後ろで何か動いているのが見えた。
どうやら私の知り合いではない人たちも、気がついたようだ。
しばらくその人たちの様子をちらちら見ていると、やはり混乱している様子だ。
一人は男で、一人は女。男の人はすごいかっこよくて、女の人もとてもかわいらしい顔立ちをしている。二人の会話が少し耳に入ってきたが、喋り方からするとこの二人付き合っていそうだ。
裕也と篤にあの人たちと知り合いかと聞くとあっさり知らないといわれた。

「ここはどこですか？」

二人のうちの男が私たちに聞いてきた。

「私たちも知らないんですよ。目が覚めたらここに。」

私は優しく返答した。

「そうですか。私たちもなんですよ。」

どうやらこの男女もこの部屋に目が覚めたらいたらしい。

とりあえず、この部屋から出る方法を考えましょうと提案しようとした瞬間であった。

「ＳＴＡＧＥ１」

という音声と共に壁の高いところに「ＳＴＡＧＥ１」表記された。

「なんなんだ？」

篤は言った。

「分からない。」

裕也は答えた。

男女のうちの女が天井のほうを指差して、

「あれ、見て！」

といった。全員が一斉に彼女が指差すほうを見た。すると、黄色い真四角のブロックが天井からゆっくりと降りてきていた。

「なんだ。あれは。」

冷静に男女のうちの男が言うと、

「テトリスだ・・・。」

と篤は答えた。

皆、黄色い真四角のブロックをただ呆然と見ていると裕也側の壁の一番奥にドンと音を立てながら落ちた。

「やっぱり。」

篤は言った。

私たちは下から見ていたので、最初は黄色い真四角のブロックがテトリスのテトリミノだとまったく気づかなかった。しかし壁際に落ちてから分かった。これはテトリスのテトリミノだと。

私たちはここが最悪な場所だと気づいたのはまだ先のことであった。

1Line（後書き）

始めまして。サイゼリヤの店長です。小説を書くのは初めてです。分からないことも多々ございます。そこで、もし読んでいて、文法的に。または漢字等の間違いがございましたら、ご報告よろしくお願いします。定期的に更新していきたいと思いますのでよろしくお願いします。

2Line

壁の一番奥に黄色いブロックが落ちてきた。
現在黄色いブロックの置いてある壁のほうから順に裕也、篤、私、理沙、男、女だ。
皆が唖然としていると、次のテトリミノが落ちて来ていた。
そのテトリミノは横にブロックが二つ、その左のブロックの上に二つブロックがある。L字型のテトリミノだ。そのテトリミノは裕也の上をゆっくりと落ちてきている。

「ちょっと、つめてくれ」

裕也は言った。
すると全員が女のほうにつめた。
そして、裕也の方にL字のブロックが横になって、下が三つ。一番左のブロックの上にひとつブロックがある形になって、黄色い真四角のテトリミノの隣にドンと落ちてきた。
すると、落ちてきたブロックを見て篤が言った。

「ひとつのブロックの大きさは見た感じ1m×1m位だ。さらに部屋の幅にぴったりだ。黄色い真四角のテトリミノはブロックが1m×2だから高さは大体2mほどってところだな。」

その篤の話は部屋にいた全員が聞いていた。篤は続けた。

「裕也そのテトリミノを動かしてみてくれないか?」

裕也はそう篤に言われるとテトリミノを動かしてみようとしたが、びくともしなかった。

「男の力でもびくともしないってことは、相当重いな。もしもこれの下敷きにでもなったら・・・。」

話の続きは言うまでもなかった。さらに篤は続けた。

「俺はテトリスには詳しいと自負している。テトリスは１０×２０といった形のステージになっている。横が１０で縦が２０だ。もしこれが本当にテトリスならこの部屋もそんな感じの形になっていると思う。今黄色い真四角のテトリミノがひとつ。横のＬ字のテトリミノがひとつ。ということは横に五つ埋まっている。そろそろ危なくなってくるんじゃないかな。」

篤の言うことに皆が頷いた。

「次のがくる」

理沙が言って上を見た。すると縦に四つのテトリミノが来た。

「横になって降ってきたらひとたまりもない。」

と男が言った。すると、最悪なことに横になって男の上にゆっくり落ちてきた。男とテトリミノの距離は大体十メートルほど。

「つめてくれ。」

男がそういうと裕也はまずＬ字のテトリミノによじ登ってから黄色の真四角のテトリミノの上に移った。篤もそれに続いてＬ字のブロックの上に登ってから黄色の真四角のテトリミノに移った。私と理沙はＬ字のブロックの上によじ登った。

男は横になっているＬ字のテトリミノと縦に四つのテトリミノのスキマに立って女に手招きをしていた。

「有希、早く来い。」

男がそういうが、女性とテトリミノとの距離は残り４ｍほどだ。どうやら死が迫っているのを感じて腰が抜けてしまったようだ。その場で泣き崩れてしまった。
しかし、男は何もすることが出来なかった。なぜなら男が助けに行って戻ってくる前にテトリミノは地面について二人ともぺちゃんこになってしまう。
運良くテトリミノは縦になり、男の２ｍ横にテトリミノが落ちた。
男はテトリミノ越しに、

「すぐ助ける！だから待ってろ！死なせたりなんか絶対にさせないからな！」

男は力強く言った。しかし、これは決して助かったとはいえないと遠まわしに言っているようなものだ。黄色い真四角のテトリミノとＬ字のテトリミノだけで横に５マス分使っている。さらに男がたっていたのは６マス目とするとそこから２ｍ離れたところに縦のブロックが落ちたということは女は袋のねずみになってしまったわけだ。もしもまた黄色い真四角のテトリミノが着て、女の上に落ちたら最悪だ。

「頼む！足場になるようにテトリミノよ！落ちて来い！」

男は大声で祈っていた。すると、上から黄色いテトリミノが上から落ちてきた。
Ｌ字のテトリミノの横に落ちれば足場になって彼女のことを助けら

れるかも知れない。しかし、
もしも９マス目と１０マス目のところに落ちたら確実に女は死んでしまう。一か八かだ。

男の願いも虚しく黄色い真四角のテトリミノは女性にゆっくりと向かって落ちている。

「あああああぁああああああぁあぁああぁぁぁぁああ！！！」

男は狂ったように叫びながら縦になっているテトリミノを殴っている。

テトリミノ越しに女の泣き声が聞こえてくる。

そして黄色い真四角のテトリミノは縦になっているテトリミノで見えなくなってしまった。

そして、テトリミノ越しに、グシャ！となんとも生々しい音が聞こえてきた。

男はその場に泣き崩れた。

「なんで・・・なんで俺じゃなくて有希なんだ・・・。」

涙を拭った彼は私たちのほうを向いた。

「有希のためにも俺は絶対に生き延びる。しかし、縦のテトリミノだけでも４ｍほどの高さはある。一人じゃよじ登ることが出来ない。女性の方々は２ｍでもきついのでは？必ず皆さんで協力して生き延びましょう。」

彼の顔は勇みだっていた。

私たちも死ぬわけには行かない。

私たちはこうして、協力してこれからの困難を乗り越えることに決めたのである。

佐藤　有希　死亡。

2Line（後書き）

二話を見ていただきありがとうございます。誤字脱字などがあったり、文法的に変だったりしたら、ご報告をお願いします。

3Line

私たちが団結を固めると、

「おい、次のがくるぞ。」

男は言った。

上を見ると黄色い真四角のテトリミノが落ちてきている。地面までの推定距離十五メートル。

「遅れたな。」

男が言った。

「なにが」

すかさず裕也が口を挿んだ。

「自己紹介だよ。俺は上谷宏。よろしくな。」

男がそういうと。

「俺は篤。こいつが裕也で、彼女たちは河合と姫野だ。」

篤が全員分の自己紹介を簡単に済ませてくれた。

「よろしく。」

私と姫野が一斉に言った。

「テトリミノがあっちに向かって落ちてるぞ。」
裕也が縦に四つのテトリミノを指差して言った。
落ちてゆく黄色い真四角のテトリミノに皆の視線が集まった。
すると、黄色い真四角のテトリミノが突然空中で止まった。その時のテトリミノと地面との距離、約八メートル。

「何？」

姫野がそれを見て言った。皆もこんなの初めてなので混乱している様子で、姫野の質問に誰も答えることが出来ずにいた。周りを見渡していると、壁に何かで映写されているように文章が並んでいる。文字はとても小さく、Ａ４ノートに書く位の大きさで、文字がずらりと並んでいる。
私はその文字をさわりながら皆を呼んだ。

「なんだこれ？」

裕也が壁の文字を見て言った。
私はその文章を声に出して読んだ。

「この部屋から出る方法は二つ。一つ目は、君たちが次々と落ちてくるテトリミノの犠牲になって、最後の一人になった時点でゲーム終了。最後まで生き残った者がこの部屋から出られる。二つ目は、この部屋の最上部には扉がある。その先は出口だ。その出口から出れば全員助かる。しかし、テトリミノが扉の近くまで積みあがらなければいけない。」

「テトリミノが最上部まで積みあがらないといけないのか・・・。」

篤が言った。確かに相当な体力と気力が必要になるだろう。
しかし、私はどんなに困難な道であっても、二つ目の方法で全員で助かろうと思った。皆もそう考えたに違いない。すると、私の心の声が聞こえたかのように、

「二つ目の方法でみんなで出よう」

と上谷が言った。みんなもその案に賛成した。
すると、それを待っていたかのように、空中で止まっていた黄色い真四角のテトリミノが落下し始めて、壁の文字はいつの間にか消えていた。。

3Line（後書き）

誤字脱字、漢字等の間違いがございましたら教えていただけるとありがたいです。よろしくお願いします。

4Line

真四角のテトリミノが落下し終わるとすぐに次のテトリミノが落ちてきた。次のテトリミノの形は真四角だった。

「おい、また真四角かよ」

裕也が言った。
そういいたくなるのも分かる。

「しかし、縦に四つのが来なくてよかったじゃないか。潰される可能性も横になると高いし、何より４ｍもあると、さすがに超えるのは困難だから道もふさがれる。」

上谷が言うと、裕也も頷いていた。

「真四角のテトリミノはそっちに落ちるんじゃないかな？こっちに詰めろよ。」

裕也がそういうと、皆裕也の方に詰めた。
裕也は安全だと思われる、横になっているＬ字のテトリミノの上に乗った。

ふと上を見ると、さっきまで大分上にあったテトリミノがない。見当たらない。
どこ？と言おうとした瞬間、裕也が悲鳴を上げた。

「うがあああああああああ」

「どうした！？」

篤が聞くと、裕也の下半身の上に真四角のテトリミノが乗っている。
さっきまでまだまだ距離があったのにいつの間に・・・。

「うううぅ・・・」

うめき声を上げながら裕也が虫の息をしている。

「大丈夫か！？」

篤はそういいながら、裕也の手を引っ張ると、ぐちょ。という音がした。

「ひいいいいいいぃいぃぃ！！！」

篤が悲鳴を上げた。

「どうした？」

私がとっさに聞くと、篤がゆっくり振り向いた。
その手には裕也の上半身を持っていた。
裕也の舌は口から出ていて、上目をしている。
口からはよだれが。腰のから下はない。もちろん血がポタポタたれている。

「きゃあああああ！！！」

姫野がそれを見て悲鳴を上げた。
しかし、なぜだ。あんなに上のほうにテトリミノがあったのに。

いつの間に裕也の上に。

「なんで、いつの間に・・・・。」

私は小声で言った。

すると、篤は、

「ハードドロップだ。」

と言った。

「なんなんだ。それは」

上谷が尋ねた。

「テトリミノを一番下までいっきに落下させるんだよ。」

篤が答えた。私は、それじゃ太刀打ちできないじゃないか。心の中で叫んだ。

「上の方にあっても安心出来ないってわけだ。」

現在の状況を整理しよう。左から、篤、私、姫野、上谷。テトリミノは、左の壁の一番奥に真四角のテトリミノ。その横に、横になっているL字のテトリミノ。その上に真四角のテトリミノ。右の壁の一番奥に真四角のテトリミノ。その横に縦に四つのテトリミノ。現在、縦に四つのテトリミノと高さ三メートルほどになっている、L字のテトリミノと真四角のテトリミノに囲まれている。

早くこの部屋から出たいよ。

菊池裕也　死亡

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6524l/

テトリス

2010年10月9日13時14分発行